

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：30115

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520682

研究課題名（和文）帝国の少女の植民地経験 - 京城第一高等女学校を中心に

研究課題名（英文）Experiences of Young Women in the Imperial Japanese Colonies: The Alumnae of Keijo Daichi Women's High School in Korea

研究代表者

平子（広瀬） 玲子（TAIRAKO (HIROSE) REIKO)

北海道情報大学・情報メディア学部・教授

研究者番号：60216596

研究成果の概要（和文）：京城第一高等女学校で学んだ少女たちの体験は、豊かな階層の家庭に育ち、高いレベルの教育を受けたという限定された世界での植民地経験である。内地の女学校に比較して教育内容は高く、この女学校では良妻賢母主義を越える教育がなされていた。居住空間において日本人と朝鮮人はほとんど分離されており、植民地ということを認識しえない構造があった。植民地支配の暴力である。少女たちの人生を暗転させた敗戦と過酷な引き揚げ体験を経たのちに、植民地に暮らしたことの意味を問い返そうとする人々が出てくる。このなかに植民地支配批判の契機を見ることができる。

研究成果の概要（英文）：The young women who studied at Keijo Daiichi Women's High School in Korea experienced Japanese colonial life in a confined society, growing up in wealthy families and receiving a comparatively higher level of secondary education than their counterparts in Japan did. The school provided its students with instruction that transcended the traditional and more basic principle of raising "a good wife and wise mother." The Japanese colonists and Koreans in Keijo lived almost completely apart, many of these young women did not consciously realize that they were living in a colony. These girls' unawareness embodies the true "violence" and insensitivity of colonial rule. The Japanese colonists and Koreans in Keijo lived almost completely apart, many of these young women did not consciously realize that they were living in a colony. These girls' unawareness embodies the true "violence" and insensitivity of colonial rule. With the defeat of Imperial Japan and its withdrawal from the colonies, the lives of these young women took a turn for the worse after they returned "home". Afterward, some of them began to examine the meaning of their having lived in a colony. Amid these reflections, opportunities for criticism on colonial rule can be seen.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：植民地経験，オーラルヒストリー，女学校，同窓会，引き揚げ

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで女性の支配への加担というテーマに関心を持って研究してきた。当初

は日本地域にその関心は限定されていたが、満州地域へ進出していった知識人女性が果たした役割、「大陸の花嫁」として庶民女性が果

たした役割へと関心を移した。現在は植民地朝鮮における体制内婦人団体の活動に注目し研究を進めている。このような経緯で、当時朝鮮で生まれ、暮らした女性たちにインタビューする機会を得ることになった。対象者は京城第一高等女学校卒業生の二人であったが、今なお同窓会組織が活発に活動し、年一回の集まりを持っていることを知った。また、同窓会名簿(2008. 5. 1 現在)によれば、連絡先の明らかな者が1,452名存在していることが判明した。そこで是非この同窓会メンバーの植民地経験を読み解いてみたいと思うようになった。

2. 研究の目的

日本の植民地であった朝鮮に植民二世として生まれ育ち、生活を送った女性たちの植民地経験を読み解き、それが植民地支配にとってどのような意味を持ったか、また戦後の歴史のなかでどのような意味を持っているのかを明らかにする。とりわけ植民地という文脈のなかで彼女たちの経験を位置づけること・その意味を問うこと。さらにその経験が日本の敗戦後の生を生きた彼女たちの中で、どのように総括されているのかについても考察する。それは日本社会に今なお継続する植民地主義・いまだ総括されない植民地支配責任という問題を考察することにつながる。

3. 研究の方法

具体的には、京城第一高等女学校卒業生(中途退学生を含む)を対象とし、アンケート調査・インタビューに基づき上記課題について考察する。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

①植民二世として生まれ育ち第一高女へアンケートに回答した21名中3名を除く18名が朝鮮で生まれている。生年は1915年から1930年である。父の職業は官吏・教師・商社員・会社員・貸家業・土木建築業・商店(呉服商 or 時計店)・果樹園関係など様々である。彼女たちの大半は京城で育っている。小学校6年の課程を終え京城第一高等女学校(以下第一高女とする)を受験した。大半が自分の意思で第一高女に進学している。中には「母の姉妹がすべて第一高女を出ていた」、「母・自分の姉が第一高女であった」という一族第一高女組がいる。小学校では14名が受験のための補習を受けている。早朝・放課後に教師が熱心に教えた。小学校の教師にとっても第一高女に何名を合格させるかは自身の勤務評価に直結するものであり、熱が入った模様である。京城の小学校では「卒業したら進学するのが当然」という雰囲気があり、進学しない

者はほとんどいなかった。それだけ経済的に上層の人々が暮らしていたのである。

②第一高女での授業

アンケートから朝礼・授業・遠足・修学旅行・運動会・音楽会などの様子。また戦時体制を支えた様子が明らかになった。

特筆すべきは「良妻賢母」育成にとどまらぬ教育が行われていたことである。インフォーマントに対して、第一高女の教育は「良妻賢母を育成する内容だったと感じますか。それともっと他の要素もあったと思いますか」という問いをぶつけた。良妻賢母という方針はあったとしたうえで、「自由な思想」「向上心や知性・教養」を求めた。「学問的なところ」があった。「頑強な身体と個人の確立」を要求された。「教育水準は高かった」。戦争中ということもあり「自立する女性の育成」を感じた。「得意とする課目・技能を伸ばそうとする方針」を感じた。「上級学校進学目的」もあった。「軍国主義的要素もあったが、さほど強制的ではなかった」という回答を得た。当時の高等女学校の教育方針の大枠が良妻賢母の育成であったことは間違いない。しかし植民地のエリート女学校は卒業生の中から多数の上級学校進学者を出していた。戦争が激しくなるとこの傾向に陰りが見えるが内地の女学校に比較すれば高い比率の進学組がいた。インフォーマント21名を見ても何らかの上級学校へ進学したものが18名。進学しなかった者は3名に過ぎない。このような進取の気性があったと思われる。また生徒もそれをあたりまえとして受け止めていたし、教育水準も高かったのである。このことは途中で内地の女学校に転向した者が「水準が低くてがっかりした」と答えていることから裏付けられる。第一高女のみならず当時の京城は高い文化水準を誇った植民都市だったのである。さらに内地の学校に進学した者が「大陸育ちはどこか違う」「しとやかさが無い」などと言われたことから裏付けられることができる。同じ高等女学校といっても、第一高女の教育内容・学校の気風は内地女学校の良妻賢母を忠実に育成するものとは異なっており、内地より開放的であったとの結論を得た。

③植民地認識～朝鮮・朝鮮人をどのように見ていたか

朝鮮で生まれ朝鮮で育った少女たちと被支配者であった朝鮮の人々との接点はあったのだろうか。インフォーマント21名中、朝鮮人のクラスメートを持った人はいない。そもそも1938年以前は朝鮮人が通う女学校は女子高等普通学校として、日本人が通う女学校とは別にあった。したがって第一高女に入学するのは朝鮮人社会の中では極めて特殊な存在であった。「クラスに二人の貴族(両班のこと)の娘とかいう人がいましたが、話した事も覚えていません。孤立していました」「クラスに

一人なので友人にはなれなかった」というように、たとえクラスに朝鮮人がいたとしても、日本人女学生にとっては敬して遠ざけるといような関係になりがちだったようである。

この反面父母を介しての間接的接触は多い。父の職業関係の付き合いで家に朝鮮の人々が入り出していたという者。使用人一家と家族ぐるみの親しいつきあいを経験している者。新興住宅地で日本人と朝鮮人の雑居地域だったので、電話の呼び出しなど親しくしていた者。使用人の家に遊びに行き、「長老を大事に敬い、アボジの前ではタバコも吸わないのにびっくりした。オモニ(使用人をこう呼んでいた)にはキムチの漬け方も本格的に習うことが出来て」自慢の一つになっている者。このように見ると大半は父を介して、使用人を介してというところにとどまっている。京城の町は日本人居住区と朝鮮人居住区は区別されており、雑居地帯はまれであったので接するチャンスそのものが奪われていたのである。こうしたことが少女たちの朝鮮人への眼を閉ざしていくことになっていた。

朝鮮を植民地だとまったく認識していなかったのは3名である。「学校でも親たちからおしえてもらわなかった」「学校も居住区域も分けられていましたので、考えてみたこともありませんでした。海のむこうの日本が外国みたいでした」。成長する過程でなんとなく悟ったという者は、「小学校の頃は知らないで一つの地方のように思っていた」「日本の一部との思い込みが強くあり」「仲良く共に暮らしてゆこう」との認識だった。

朝鮮人をどのように思っていたかについて、植民地だとまったく認識していなかった3名は「国籍は違いが普通の感じで暮らしていた。中国の人も商人や農業をやっていたし、違和感なく暮らしていた」「朝鮮の人たちは日本人と同様に心の通うやさしい人と思っていた」「書くのはつらいのですが、全く気にしていませんでした。接点がなく、あまり見分けはつかなかったし」という。植民地を植民地と認識しないゆえにこのような感じを持ちえたともいえるが、強力な植民地支配がこのような植民者を盲目にする暴力として表れていることを見る必要がある。植民地支配の暴力性はこのようなかたちでも貫徹しているのである。

他方植民地と知っていた者の中では認識が分かれる。朝鮮人を明らかに見下していた者は、「日本人より下だと思っていた」「大和民族が最高なので軽く見ていた」「日本人の手下的存在と感じていた」という。日本人優遇を感じとり、「成長するにつれ、何か支配されているらしい」「日韓併合とは言っても常に日本優遇で、朝鮮人が可哀想だと思っていた」という者。

植民地だと知っていても公平につきあおう

という思いの者は、「母が公平な人でどなたとも同じ様につき合っていたので自然に親しみを感じていましたが」。「両親も私も人間を差別することがなかったのでその点は悔いが残りません」という。この二人が二人とも1940年に実施される創氏改名に対して疑問を述べている。「創氏改名というのはおかしいと思っていました」「創氏改名の件は「えっなぜ〜?」という疑問とひどいことをする…と正直思いました。金さんも金山さんとか」。このように少女たちは植民地と朝鮮人に対するある意味で多様な認識を持ち、時には素朴な疑問を感じていたことがわかる。

④ 敗戦～大日本帝国の崩壊をどのように迎えたか

日本の敗戦前にインフォーマント中の3名はすでに本国へ帰国していた。18名は朝鮮で敗戦を迎えたが迎え方は様々である。すでに結婚していた者、職業に就いていた者、在学生だった者それぞれにドラマがあった。京城以外にいた者は、「土地周辺の不穏な空気を感じていたが、朝鮮人の教師(夫の同僚)が連日詰めてくれ、子守(使用人)の娘の父兄も来てくれ、不安なく生活できた」という。「国の力が弱まるとかくも国民は困難に遭わねばならぬかと」という思いを味わった者。軍属として勤務していた者は、「8月15日、任務司令部内防空庁舎と共に玉砕かとも覚悟した。が解雇となり、証拠になる物一切焼却、荷物はリュック一つ、家も家財もタダ同然、毎日庭で焼却作業、朝鮮人の反乱、満洲、北朝鮮の人達を先に帰すため京城在住者は騒乱の京城で引揚げを待つ」という。「引揚げまでは売り食い着物を売ったり、朝鮮人(使用人)から食糧を都合してもらって暮らした(日本人の貯金は凍結された)」。学校に学んでいた者は、「炎天下の校庭で放送を聞く。負けたことはわかった。街頭は白一色にあふれる」という。治安状況については個人差がある。「特別朝鮮人よりの危険もなく米軍の手助けもあり(日本人には好意的でした)」と米軍進駐によって京城の治安が保たれたという者。片や「外は治安が悪い為出られませんでした」「何が何だかわからぬまま、ともかく家中の物を燃やしてしまいました。家には鍵をかけ外出はできませんでした」。「父が女の子は家から外に出るはあぶないと云っていた(朝鮮の人にやられるからと云って)」という者もある。これはおそらく地域による差と考えられる。総督府や軍隊駐屯地があった地域とそこから離れた地域では治安状況が異なるからである。ましてや朝鮮人との雑居地帯なら不安はあったことだろう。結婚して平壤の近くで生活していたある者は次のように記す。

敗戦の1月前、北朝鮮の平壤の近くの小さな村に疎開した時、戦争終結の放送後ワラビキの小さな家の軒下に見た事のない

旗が一勢に出ていた。今の韓国の国旗であった。これ程きびしい官検の目の中、どこでどうして隠していたのか、恐ろしくなり、深く考えさせられた。

このインフォーマントはこの体験を通してはじめて朝鮮民族のありように触れたということが出来る。

1943年入学のある在學生は次のような8月15日体験を持った。

毎年8月の声を聞くと8月15日の終戦記念日を思います。(中略)

8月15日昼すぎ事務室に何か用紙を届けに行きそこで直立不動の姿勢でラジオを聞いている事務室の人の姿を本当に不思議な気持ちで見ました。8月15日の引率の先生は生物の押野先生でした。先生のお話をみんな気もそぞろ落ち着く雰囲気ではなかったと思います。外に出ると油蟬が一斉に啼いていました。憲兵さんが三、四人だったと思います京城駅まで送って下さいました。汽車が駅に着く少し前徐行しながらの汽車の窓から怒涛の様な大勢の大声が何か吠えてうなっている様な声を聞いて足元から血がひいてゆく様でした。めちゃくちゃな人の群れに押し出されて駅の外に出た時、お餅がかりの〇〇〇さんが泣きそうな顔でお餅の入った箱を持って人波をかきわけて来ました。みんなそれぞれいつも帰宅時にお塩餡の大福餅を一つ頂いて帰っていました。人波に圧されて幾人かの人が倒れました。本当に見た事もない旗の波、それははじめて見る韓国の旗でした。トラックの上、自動車の上まで沢山の人が乗って旗を振りマンセイ、マンセイの大合唱で叫び吠えていました。マンセイの意味は知りませんでした。怒涛のように聞えた大きいうねりの声はそれでした。道路にずっとはられた綱も何のその、押し寄せる群衆を制御する憲兵が5メートルくらいの間隔で道の両側にず一つと並びときどき空にむかって空砲を撃っていました。本当に身動きがつかない状態で押され一緒に汽車を降りた友達もどうしたのか押されていた私でしたが私はしっかりと京城駅前の8月15日の出来事を見ました。何が何だかわからない内にどうやって電車に乗ることが出来たのかそれは思い出せませんが家へ着いたとき母と妹がとびついて来ました

このような体験は少女たちにとって大きな衝撃だったと思われる。混乱の中でしかし少女は目を背けることなく8月15日の光景を記憶にとどめた。第一高女の教師は玉音放送を教員室で聞き涙を流した。街頭に溢れるマンセイの声の中で、日本人は電車に乗せてもらえず清涼里まで徒歩で帰ったと証言する。

京城女子医学専門学校に進学し学んでいた者は、炎天下の校庭に整列して玉音放送を聞いた。とにかく在学証明書だけを受け取り帰宅した。

朝鮮人クラスメートは大ぴらに朝鮮語をしゃべりはじめた。後で聞くところによると、この人たちはこの日大極旗をもって解放のよろこびの旗行列に参加したそうである。帰宅の途中の光景は、強烈な印象となって残っている。敦岩町、黄金町通り、東大門付近、電車の中から見る町は白一色にあふれていた

加藤聖文は「京城は玉音放送が流れた直後は意外なほど落ち着いていたことが、当時京城にいた朝鮮人の証言からも確認できる」としているが、この少女や教師の体験はその指摘に再考を迫るものである。

⑤ 第一高女の終焉

第一高女の終焉にかかわった5名の在學生がいた。9月10日に彼女らは校舎に来るよう命じられた。以下の文章によってその様子を知らることが出来る。

10時少し前、府庁の前を南大門の方からリッジウエイ中將の進駐軍が総督府の方へ行進して行くのに会いました。大々的に交通規制がしかれ、アメリカの旗、韓国の旗があのだい道の両側に集まった大群衆の手で振られ、私は言葉にならない気持ちで眺めていたのを覚えています。校門を入るとあの大きな槐の木の下に大きな大きな穴が掘られて色々なものが投げ込まれていました。主に紙のようで焔が槐の枝まで届いたのか焼け焦げた葉を見てかわいそうと思ったことをしっかり覚えています(中略)

私達5人ともこもごもの思いに胸がつかれそうになりながら、楽しかったあんなこと、こんな事どもを話し合い特別に大きな声で笑い溢れる涙を拭いたりしました。

そして校門に深々と最敬礼をして第一高女に最後の別れをして家路につきました

第一高女の校舎は8月下旬から北朝鮮方面からの引揚者の収容所となっていたが、9月8日米軍の宿舎として接收されるとの通知を受け、9月11日正午までに校具備品等一切を搬出して清掃するよう命ぜられた。この作業に狩り出されたのが5人の在學生であった。第一高女事務所はこの後第二高女へ移転し、さらに三坂通1の学校長官舎へ移転した。この際持ち出しえたものは在學生の学籍簿と執務用の重要書類用具のみであった。10月5日に石川学校長から京城府学務課長に一切の事務引き継ぎを終え、校地校舎備品校具学籍簿等を京城府に引き渡し、37年の幕を閉じた。

⑥ 引揚げとその後

戦争の終わりが少女たちにとっては始まり

であった。これからやってくる引揚げと戦後の長い人生。「引揚げなければならない事がびんと来ませんでした。私には故郷がないからです。終戦になってはじめて日本人、韓国人(朝鮮人)の違いを意識しました。生まれ故郷の京城が外国になる…という淋しさは強いものでした」。この言葉は多くの少女たちの気持ちを代弁する。植民二世としての少女たちは故郷を追われ見知らぬ日本へと帰還を余儀なくされるのである。それは選択の余地のない旅であった。

植民二世の父母の大半は内地(本土)に生活的基盤を持たない人々であり、わずかな縁故をたよって引揚げざるを得なかった。それも無からの出発であった。当時朝鮮から引揚げ者に携行を許されたのは一人当たり 1000 円の所持金だった。これ以外はそれぞれが背負えるだけの身の回り品であった。18 名のインフォーマントの帰国時期は 1945 年 9 月という早い者から、1947 年 2 月という者まで幅がある。夫や父母の縁故を頼ってひとまずの落ち着き先を探したが、「無からの生活」を始めざるを得ず、肩身の狭い居候住まいを余儀なくされ、家族離れ離れに暮らさざるを得なかった者もいた。優越者の立場だった植民者の生活から引揚げ者の生活への転落。「転々と引っ越しせざるを得なかったのはほとんどの引揚げ者共通」という指摘はまさにそのとおりであろう。引揚げ者への眼は冷たく「後ろ指をさされた」と言う者が多数であった。ここには戦後社会の戦争責任・植民地責任への総括の未熟さが現れている。植民者だけが、引揚げ者だけが植民地責任を負うべきなのかという問題がここには示されている。さらにこの問題ははまだ積み残された課題として残っている。インフォーマントの一人は引揚げで博多にたどりついたとき、博多埠頭のすみっこに「侵略者のおまえらがかえってくるから、われわれが餓える」と書いた張り紙を目にし、衝撃を受けている。また「あんたらは外地で好きなことをして迷惑をかけて生きてきたんだから、これからは苦労して当然だ」とも言われている。植民者のみに侵略者という責任を負わせる意識が如実に出ている。内地にいて植民地支配体制を支えたことへの自覚は微塵もない。これが敗戦後の日本人の平均的意識であり、戦後 65 年経過してもこうした意識は払拭されず総括されていないと言いうる。したがって多くの引揚げ者が近所の人との口うるささに閉口して、田舎には住みたくない都会へ出るようになった。すでに結婚していた者も、未婚だった者も生活のために持ち帰った衣類を米に代えるだけの生活。それだけでは間に合わず大半が就職している。田舎で農業の手伝いをしたり、担ぎ屋をして家族を養った者もいた。また生活のためということで結婚した者もいた。中には病を得て療養

所暮らしを余儀なくされた者もいた。いずれにせよ第一高女同窓生の人生は敗戦・引揚げで暗転した。

⑦おわりに～植民地支配批判の契機

インフォーマントたちの中で、戦後を生きながら植民者であった自己の経験をとらえ返し、植民地支配を批判するようになった幾人かが存在する。この点についてはインタビューに応じてくれた内容の詳しい分析に待たなければならないが、ここではアンケートにおいて明確にその契機を答えてくれた 2 名について記す。

一人は植民者として暮らした日々の客観的意味について、「終戦直後、キム・ダルスの『ああ朝鮮』(小説)を読んでから」(管見の限りではキム・ダルスにこの小説は見当たらない)と答えた。このインフォーマントは植民地で生活しているとき朝鮮は植民地だということをつゆ知らず日本だと思って暮らしていた。このように何の疑問も持つことなく植民者としての生活を享受していた体験が、おそらくある朝鮮関連の著作を読むことによりその意味を再考せざるを得なくなったのである。インフォーマントは出版社勤めを経て文学者(小説家)として自立していくことになる。小説を通して日本の植民地支配を問うということ課題としている。

もう一人も朝鮮は日本だと信じていた、植民地だなどと考えてもいなかったという。16 歳で引揚げた後、さまざまな人から日本は朝鮮を支配した侵略者であり、ひどいことをしていたと聞かされる。「ショックでした」との言葉どおり、16 歳の少女にとっては受け止めるのが余りにも重い問題をつきつけられたといえる。インフォーマントはその後療養生活を送った後、児童文学者としての道を歩み、植民者としての自らの家族の生活がどのような意味をもっていたのかを、継続的に考えていくことになる。それは朝鮮で生を受け暮らしたという美しい・楽しい体験があるだけに苦痛に満ちた作業となる。出口のない迷路をさまようような葛藤の連続となった。だがこのインフォーマントのように悩み、葛藤しながら考え続けることは極めて大きい意味を持っている。植民者として暮らした一人の人間が個人としてその経験に向き合い、自己の内面からその意味を問い返していくという過程こそが、固有の植民地責任を考えることにつながると思うからである。

この 2 名に共通しているのは、植民地ということを知らずに植民者として生活したということである。他のインフォーマントは多かれ少なかれ植民地ということを知っていた。こうした点と植民地支配批判の契機がどのように関連するのか、即断は避けねばならないが多くの事例が検証されると見えてくるものがあるかもしれない。

これまでアンケート調査とその結果をもとに、少女たちの植民地朝鮮での生活を述べてきた。当初に提起した植民地責任という課題を考えるには未だ入口に過ぎないが、個々の経験をつなぎあわせることから、植民地支配というひとことからほぼれおちてしまうものが見えてきたのではないか。インフォーマントたちのくらしがいかにかに植民地支配に組み込まれていたのか。植民地・民族支配ということを見えなくしていた社会の構造的暴力の中での生活。そして植民地でのくらしそのものが実は朝鮮民族に対する抑圧であるということ。個人の経験を歴史の中にどのように位置づけていくのかが植民地における女性の役割を考える際には重要であると考えている。本報告では京城第一高女同窓生の植民地経験からこの課題に迫った。16名のインタビューの内容についての分析は事後の課題としたい。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

以下の点から、植民地研究・植民地責任論に新しい視角から切り込んだといえることができる。

① 植民地研究の中で数少ない植民者の実像に一つの事例を付け加えることができた。

② 植民二世に関する研究、特に少女＝女性の植民地経験に関する研究を開始した。支配者側に属する少女たちの目に植民地朝鮮はどのように映っていたのか、被支配者である朝鮮人がどのように認識されていたのかを明らかにした。

③ 植民二世が戦後の歴史の中で植民地支配について批判的にとらえ返す契機について指摘することができた。

(3) 今後の展望

① 明らかにした少女たちの植民地経験を朝鮮植民地支配の中に位置づける作業を行う。

② 16名のインフォーマントからのインタビューを整理・分析し(2)①②③をさらに豊富化する。特に③の点はインタビュー内容から深く掘り下げることができると予測している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計2件)

① 広瀬玲子

植民地朝鮮における愛国婦人会-1930年代を中心に『北海道情報大学紀要』22巻2号, 2011年, pp. 1-16. (査読あり)

② 히로세 레이코(広瀬玲子)

대한제국기일본애국부인회의탄생(大韓帝国期愛国婦人会の誕生)

여성과역사(女性と歴史)

13号, 2010年 pp. 93-130. (査読あり)

〔学会発表〕 (計3件)

① 広瀬玲子: 報告「ヒトの移動とコロニアリズム」へのコメント, サハリン・樺太研究会主催シンポジウム「国内植民地研究の方法と未来」2011年12月17日, 北海道大学

② 広瀬玲子「植民地朝鮮における行政当局刊行物から在朝日本人女性史の可能性を探る」国際シンポジウム「日韓相互認識-移動と視線 1910-2010」2010年12月19日, 国際日本文化研究センター

③ HIROSE Reiko Warriors on the Home Front (Asian Studies Conference Japan, 2009.6.21, 上智大学)

〔図書〕 (計1件)

① 共著: 李培鎔教授定年記念論集刊行委員会『여성의 역사를 찾아서(女性の歴史を探して)』2012年, ナナム所収論文, 広瀬玲子「働く女性に関心を寄せた女性経済学者 三瓶孝子」(韓国語) pp. 650-673.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平子(広瀬) 玲子(TAIRAKO(HIROSE) REIKO)

北海道情報大学・情報メディア学部・教授

研究者番号: 60216596